

特集 他とかかわる力を育てる

なぜ異文化理解を題材とするのか

大島 希巳江 (文京学院大学)



英語学習と異文化理解の親密な関係

英語教材で取り扱うテーマは時代と共に移り変わってきた。それぞれの時代に必要とされてきたこと、知っておくべきことが異なるため、当然のことといえる。昨今、日本国内においても異文化に接する機会は増えており、英語を使用する場面も今後増す傾向にある。異文化とはいっても、必ずしも英語圏の文化とは限らず、むしろ非英語圏の人々との接触が日本国内では多い。そうした場合でも、相手が日本語を話すのでないかぎり、共通語としては英語が使われる。このように、非英語圏を含む様々な異文化を理解するのも、英語でコミュニケーションをとる能力が求められる時代となってきている。

人は時として、自分とは異なる価値観や考え方の持ち主に対して批判的な態度をとることがある。たとえば、平気で時間に遅れてきて謝りもしない、きちんと列に並ばないで割り込む、貸してあげたものを返さないなど、自分の常識と異なる言動をとる人は日本人の中にももちろんいる。しかしその相手が外国の人だった場合、「この人は〇〇人だから」と偏見を持ってしまいがちである。異文化を理解することによって、そのような言動にも理由があり、その人が属する文化ではそれが常識なのだ、という多様性を認める姿勢を持るとよいと思う。

文化には違いはあるが、優劣はない。どの国の文化がより進歩的で優れていて、どの国の文化は未発達で劣っている、ということはない。すべての文化はそれぞれ固有の意味を持ち、それぞれの地域で最も人々が心地よいとされる文化が発達してきたのであろう。それが時として、別の文化圏では別の意味を持つために、受け入れられないことがある。し

かし、「自分とは違う」ということを「自分より劣っている」とことと取り違えないようにしたい。異文化に造詣の深い人は、違いを楽しむことができる寛容な考え方の持ち主になるのではないだろうか。

英語を身につける際に、異文化に対する姿勢を同時に身につけることは非常に重要である。かつてのネイティブ英語崇拜主義は、英語圏の文化を崇拜することにつながり、それ以外の文化を劣ったものと勘違いさせる危険性があった。じつは、英語そのものも多様な言語の1つであるという事実を英語学習、異文化理解の中で学んでゆくと、非常に柔軟な考え方が身につくのである。

異文化を理解するための題材とその意味

自分とは異なる文化、理解しがたい文化を好意的に受け入れ、それに対して良いイメージを持つことは意外に難しい。しかし、若いうちにそのような姿勢を持たせることは重要である。24NCの教材では、生徒が興味を持てるような身近な話題を導入部分とし、それぞれの異文化を尊重する姿勢をもって読み進められるように配慮されている。

1年の教材では英語圏に関する題材を中心に扱っている。レッスン6ではイギリスの伝統文化であるバグパイブを扱うことにより、日本の伝統文化にも目を向けるよう工夫している。レッスン8ではアメリカの学校生活について、ランチタイムや授業風景など、身近なテーマを中心に紹介している。これまでも生徒に好評の題材である。

2年のレッスン1では、ハワイを観光地としてではなく、伝統文化を持った地域として扱っている。レッスン6ではオーストラリアのアボリジニの思想を、ブーメランの話題からエアーズロック(ウルル)

の話題へと導くことで説明している。観光地として有名なエアーズロックであるが、いかに先住民にとって神聖なる場所であるか、という題材は時として人々が持つ野蛮な先住民というイメージを払拭する。レッスン8のインドの話題では、映画製作数がハリウッドより多いという話から、インドの多言語使用の実態に話をすすめ、インド文化や社会状況への興味を持たせる内容となっている。

3年ではフィンランドの森や気候の話題にはじまり、それと密接に結びついた人々の生活について紹介している。そして中国やモンゴルの気候や生活環境に合った住宅事情などが、多くの写真を用いて目を引くように工夫されている。英語圏に限らず、世界各地に目を向けて、それらについて英語で語れるようになるということは、この先どの国の人と話すことになろうとも心強いことである。英語で話すときは、流暢な英語を話すことだけでなく、英語で何について話すのか、ということにも注意を払いたい。

世界各国の多文化を扱うことで、英語は英語圏のみで使用される言語ではない、ということが理解されるよう願っている。そして、様々な文化や習慣を楽しみ、興味を持って、幅広い分野で活用してもらいたい。

日本文化を発信する題材とその意味

異文化理解とは必ずしも外国の文化を受信するだけではない。異文化を理解するという事は、自分の文化との違いを認識し、あらためて自分の文化を知るということでもある。外国の気候を知ることによって日本の四季を再認識したり、エアーズロックにあたるような神聖なる場所は日本だったらどこに当たるのかを考えたりする。異なる家の構造を知ることによって、なぜ日本の家には玄関が存在するのか、またなぜ日本の家では靴を脱ぐ習慣があるのかを改めて考えさせられたりもする。よく言われることだが、異文化の学習は自己発見の連続である。

1年のレッスン9では、日本の四季折々の行事を紹介している。日本文化を英語で表現するのは、じつはなかなか難しい。日本人でありながら、習慣として行っていることについては、それをきちんと説明できないことが非常に多い。英語で話すというこ

とは、話す相手はおそらく日本人ではないのであるから、相手の知らない日本文化についてきちんと言語化して伝えなければならない。これを行えるようにするには、やはり学習が必要なのである。

2年では、寿司に代表される日本の食文化、そして花火師に関する話題が取り上げられている。寿司は海外でもよく知られている日本食であるが、その色の鮮やかさや盛り付けの美しさに日本文化が表れている。花火師という職業が日本にあることを英語で説明できるということは、多くの外国人にとって有意義である。花火は日本では身近な夏の風物詩であるが、多くの国では一般の人が花火を手を持って気軽に楽しむことはできない。これもまた、日本特有の文化なのである。

3年の教材では、日本の伝統芸能である落語を海外に発信する、という題材が扱われている。これも日本文化でありながら、それがどういうものであるか、どのような特徴があるのかを説明できる日本人はあまり多くない。英語で話ができる日本人が外国人から期待されるのは、日本について英語で話してくれることである。われわれにしても、もし日本語が流暢なエジプト人が目の前にいたら、やはりエジプトの文化、社会、習慣についていろいろ聞きたいと思うだろう。逆に、英語の話せる日本人が目の前にいたら、多くの外国人は日本についてたくさんの質問をしたいと思うであろう。だからこそ、英語を学習する日本人は、日本についても英語で説明できるようになっておくことが望ましい。

これまで文化の受信を得意としてきた日本人であるが、これからは日本文化の発信にも注目していくとよいと思う。これまであまり外に向かって自己主張をしてこなかった日本人であるが、海外の人たちにもっと日本を知ってもらいたいものである。そのためにも、英語の学習者たちが日本から発信するための英語も身につけていってほしいと願っている。

